

「私はあなたに祈ります」

(詩篇5・1〜12)

一、豊かな恵みによって

詩篇5篇は7節から読みますと、意味が受け取りやすくなると思われまゝ。へしかし私は あなたの豊かな恵みによって あなたの家に行き あなたを恐れつつ あなたの聖なる宮に向かってひれ伏します。とあります。特にあなたの豊かな恵みによってに注目ください。これが重要です。「ダビデ」は、主の恵みによって神の家に行き、神に向かつて祈り、神に従う道を知っていました。(※ 作者をダビデとして読んだため、「ダビデ」としました。)

私共が神に向かつて距離を感じずに祈られるのは、神の恵みによりです。私たちは生まれながらの罪人であり、まことの神がだれであるのか、あるいは神がおられるのかおられないのかも知らない存在でした。ですが、今はちがいます。イエス・キリストによる罪の赦しを知り、父・子・聖霊なる神を信じています。それは神の恵みです。

「ダビデ」が5篇において祈ったこと、訴えたこと、御心に逆らう者は神に近づくことができないと語ったこと、神に逆らう者との決別を宣言したこと、すべては、神から授かった恵みによる

ものでした。そう弁えて5篇を読んで行くなら、意味が見えてまいります。

二、私はあなたに祈ります

1節、2節をご覧ください。私のこ

とばに耳を傾けてください。主よ。私の叫ぶ声を耳に留めてください。私の王私の神 私はあなたに祈っています。とあります。ここに、「ダビデ」が主の家に行き、祈ったことが記されています。作者がダビデであるとすると、エルサレムの神殿はまだ建設されていませんでしたから、「主の家」は「幕屋」ということになりまゝ。「ダビデ」の祈りは、理性的な「ことば」から「うめき」へ、さらに「叫ぶ声」にエスカレートしています。なぜそうなるのか。それは祈りの不思議です。始めは静か、しかしヒートアップして行き、最後は叫ぶような祈りになっているのです。これが人間的な技巧であるなら空しいですが、そうではありません。御霊の導きです。また、2節における神への呼びかけはすばらしいです。私の王 私の神と呼びかけています。イスラエル全土の王とされた「ダビデ」が、神に向かい、私の王と呼びかけています。そこに「まことの王は天にまします主なる神である」との告白が表れています。「ダビデ」は神の恵みにより、主と心が一つになっていました。そういう「ダビ

デ」が、朝の、きよい動物を全焼の献げものを献げる時間に祈ったわけです。

3節です。主よ 朝明けに 私の声を聞いてください。朝明けに 私はあなたの御前に備えをし 仰ぎ望みます。と。

三、神の聖さにふれたとき

人は神と出会ったとき、自分が汚れている存在であると知ります。そして、汚れが何であるのかが見えてまいります。それは相手を、社会を見下しているのではありません。神の聖さにふれたゆえに、何が清くて、何が汚れているのかが見えてくるのです。それが、4節から6節です。あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわいは あなたとともに住まないからです。誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行う者をすべて憎まれまゝです。あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされまゝです。主は人の血を流す者や 欺く者を忌み嫌われます。と。「ダビデ」が語っているのは、おそらく「ダビデ」の身近にいた同士です。だからたいへんなのです。そのため、「ダビデ」は主の家に行き、祈りました。今一度7節をご覧ください。詩篇5・7と。人が神の聖さにふれますと、真相が見えてまいります。ゆえに、神の恵みをいただいていなければ、いとも簡単に相手をさばいてしまうことでありましょ。 「ダビデ」には、側近も含めて自分のそ

ばにいたる同士たちの真の姿がはっきり見えました。それが、9節です。彼らの口には真実がなく、心にあるのは破壊です。彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌でへつらうのです。と。神に敵対する勢力が見えた時点で、「ダビデ」は何をしたでしょうか。10節です。神よ彼らに責めを負わせてください。彼らが自分のはかりごとで倒れますように。その多くの背きのゆえに 彼らを追い散らしてください。あなたに逆らっているからです。と決断をしています。

10節はたいせつです。神を信じ、神に従つとは、この世と調子を合わせないことだからです。

四、祝福の先取り

「ダビデ」は、身近な不信者と決別することを決断した後、祈っています。11節です。どうか あなたに身を避ける者がみな喜び とこしえまでも喜び歌いますように。あなたが彼らをかばってください。御名を愛する者たちがあなたを誇りますように。と。

最後に、12節です。主よ まことにあなたは 正しい者を祝福し 大盾のように いくしきみでおおってください。とあります。まだ見ていないこと、現実になっていないものを見ること。これは、旧約時代から受け継がれてきた、神を信じるということの現れです。いわゆる「先取りの信仰」です。